

第5章

交通・通信用具

第5章  
交通・通信用具



■スカリを履いての道踏み 越後国魚沼郡塩沢組「風俗帳」より

# ● 交通・通信用具

## 雪中を行き交う人々

豪雪地といわれる当地の冬の暮らしの中で、交通と通信の問題は極めて重要である。それは、社会的生活と深くかわり、個人の生活維持にとっても基本的な要件であった。最近になって主要道路の交通は、機械による除雪その他によって確保されるようになったが、少し前までは人々がカンジキを足につけて、降雪のあった日ごとに、一足ずつ雪を踏み固めて雪道をつけるしかなかった。

雪道といっても、道をつける人手の多寡や、何よりもその道の利用者の数によって、路面の良否が分れる。たとえば、市街地やそれらを結ぶ道であれば通行者も多く、

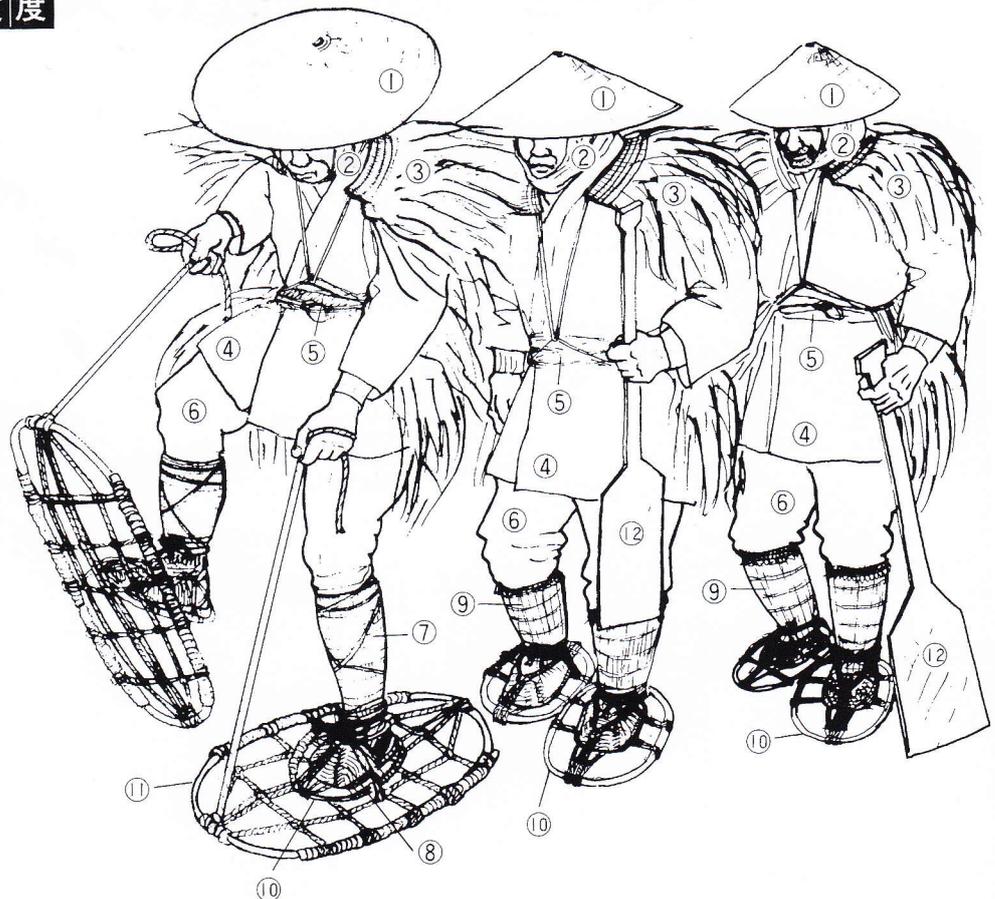
物資を運ぶ荷籠<sup>にぞり</sup>なども行き交うので、路表は固まり道幅も広がる。一方、山地の小集落間を繋ぐ山間の道などでは、一足ごとに足跡を拾って歩く状態になる。しかも雪の降りしきる日であれば、その足跡も消され、深く細いV字形の溝<sup>みぞ</sup>となる。さらに吹雪の日ともなれば、道の所在すら見えなくなるが、そうした場合、目印的な標識<sup>かんじき</sup>に助けられた。だから人々は小型標<sup>かんじき</sup>を常に用意していたし、特に夜道を歩く時には、灯火用具は必携品であった。

こうした中での相互連絡も、雪に阻<sup>はば</sup>まれて困難であったが、人々はさまざまな工夫でそれを凌<sup>しの</sup>いできた。

### 深雪時の道踏み支度

- ① ヤマガサ
- ② テヌグイ(フーコブリ)
- ③ ミノ
- ④ ヤマノノコ
- ⑤ サンジャクオビ
- ⑥ モモヒキ
- ⑦ ハツパキ
- ⑧ スッペ(下にコウカケ)
- ⑨ スッポン
- ⑩ カンジキ
- ⑪ スカリ
- ⑫ コシキ  
(ヤマシャツ)  
(フンドシ)

※ ( ) 内下着



■カンジキを履いての道踏み



■スカリを履いての道踏み

# イ 交通用具

## ① 道踏み用具

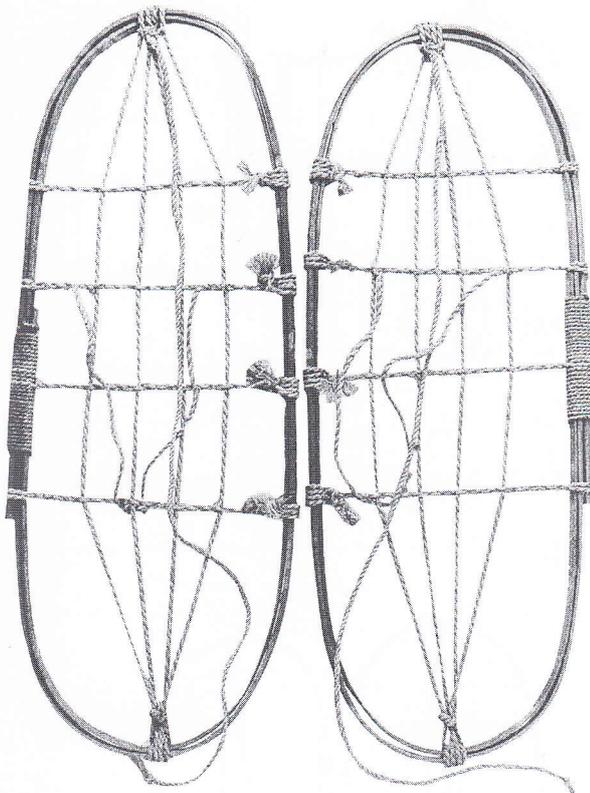
道踏みといふのは、雪の降積もった朝、自家の玄関から一般の道路も含めて、道を覆った雪を踏み固めて雪道を作ることである。この雪道は、夏場の道路上につけるものであり、それに代わる公道なので、この道踏みという作業は、ムラの住民としての義務行為なのである。しかしこの雪上の公道は、あくまで仮設道路であり、日々に開削や補修、つまり道踏みを必要とした。

道踏みの中心的な用具はカンジキの類であるが、次に述べるように、それには大小各種のものが用意され、降

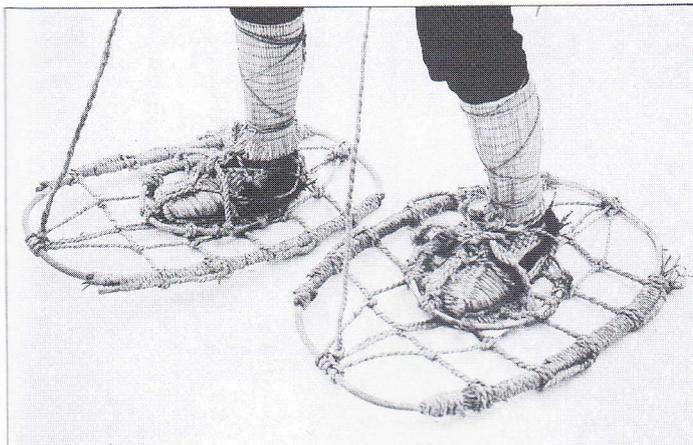
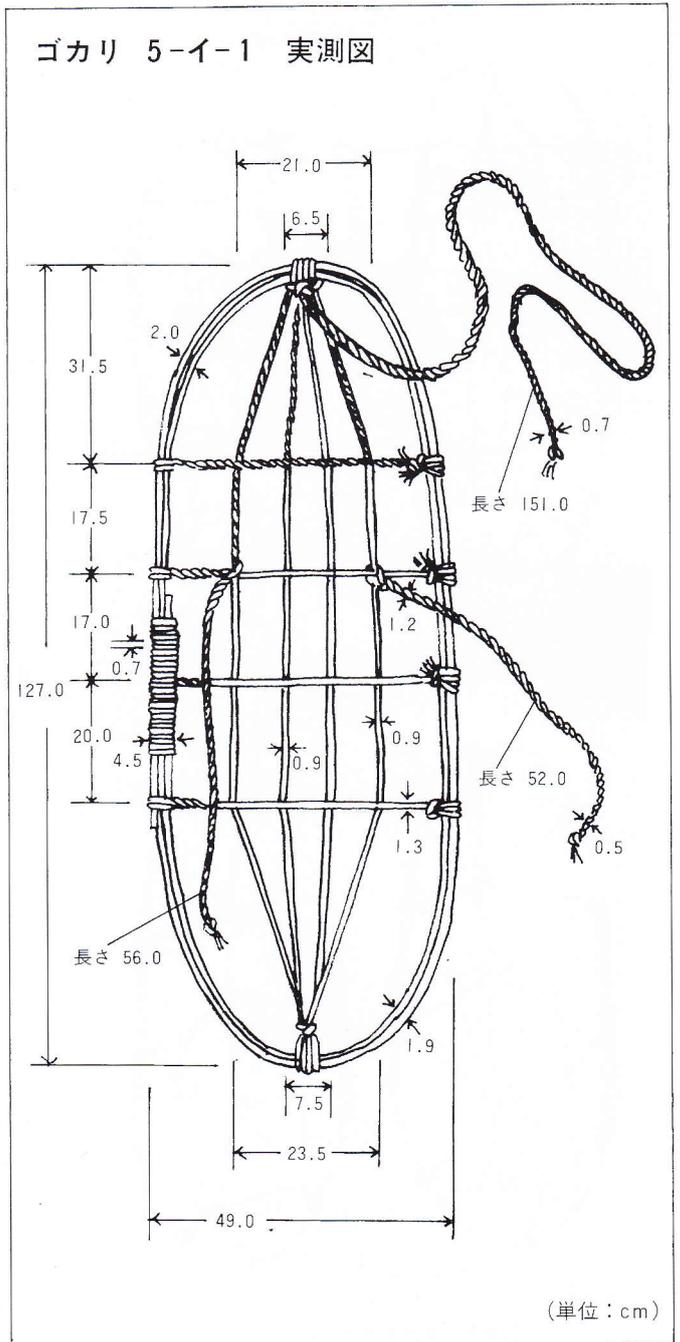
雪の多少によって、それらを使い分けたものであった。

この項で取上げるものは、道踏み専用として作られたカンジキのスカリとゴカリである。スカリは、普通カンジキの大型のものよりさらに大型で、ゴカリは、さらにそれを超える特大型だが、当地域での使用例は少ない。

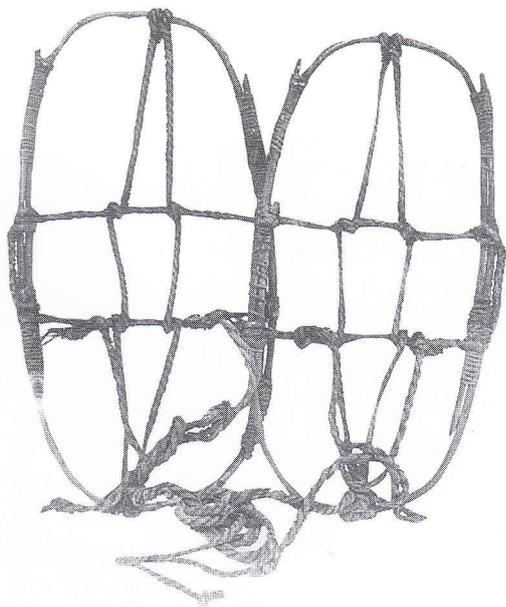
これらを用いるのは、特別な大雪の積もった時である。普通カンジキをつけてさらにこれを重ねて履くが、足の力だけでは持上がらないので、先端に取付けた綱を手に持って引上げながら踏み進む。なお、これだけでは路面が固まらないので、さらに小型カンジキで踏み固める。



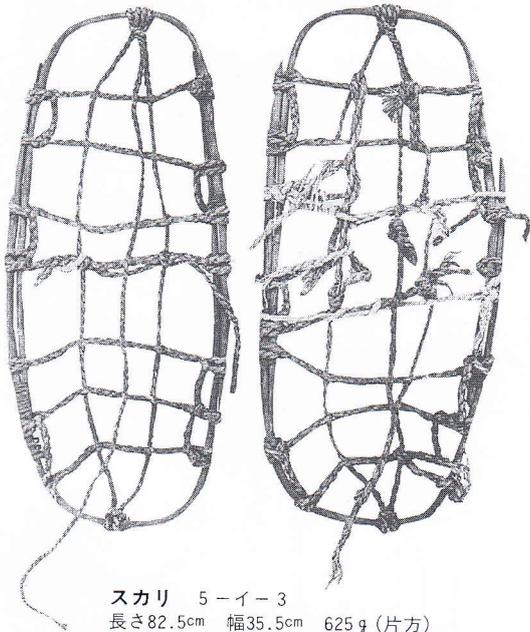
ゴカリ 5-イ-1  
長さ127cm 幅49cm 1,265g (片方)  
孟宗竹・藁縄 深雪用特大型輪標



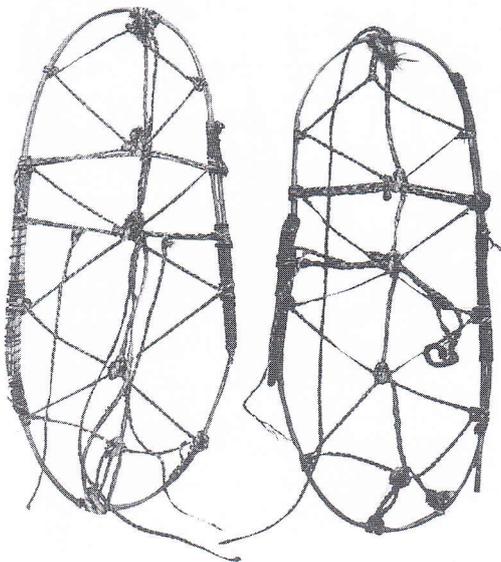
■スカリを履いた状態



スカリ 5-1-2  
 長さ71.5cm 幅34.5cm 478g(片方)  
 山竹・藁縄 深雪用大型輪標

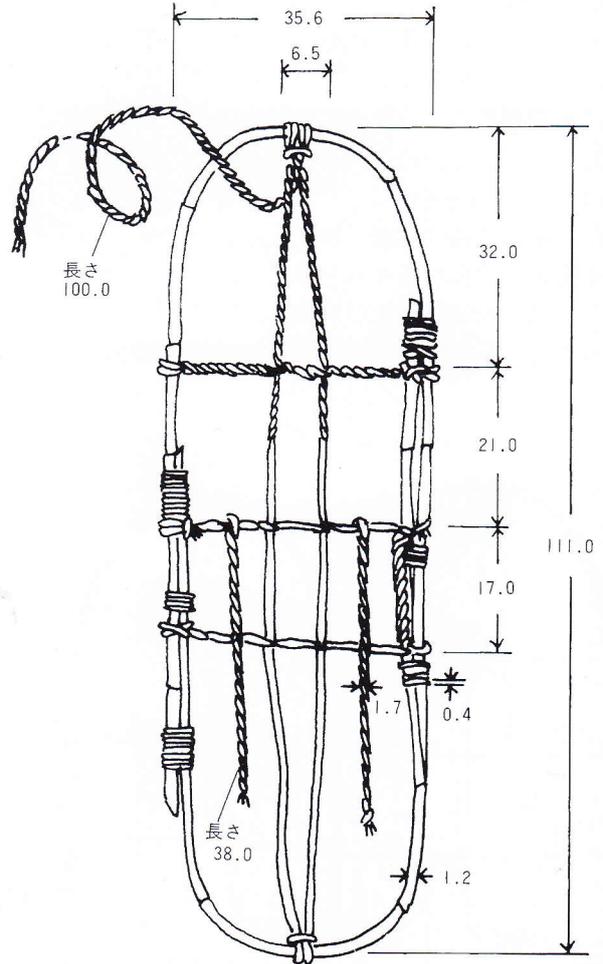


スカリ 5-1-3  
 長さ82.5cm 幅35.5cm 625g(片方)  
 山竹・藁縄 深雪用大型輪標

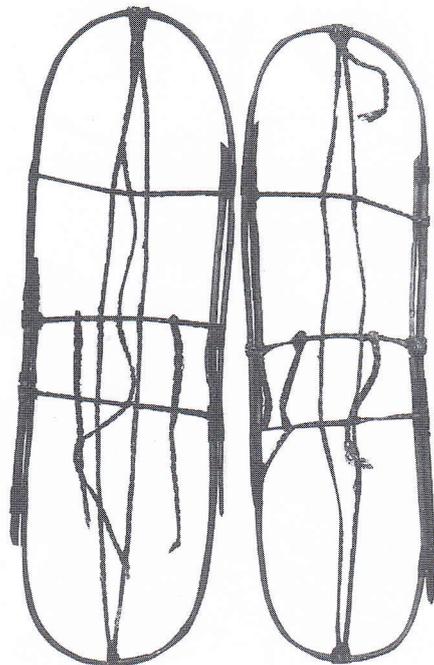


スカリ 5-1-8  
 長さ93.5cm 幅41cm 560g(片方)  
 山竹・藁縄 深雪用大型輪標

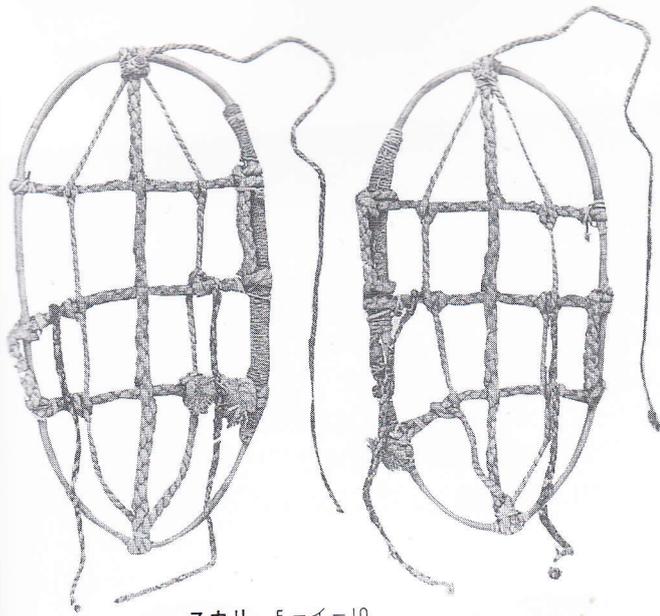
スカリ 5-1-5 実測図



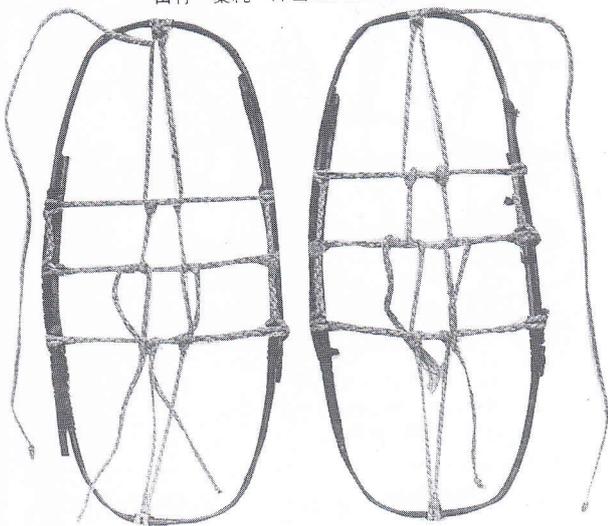
(単位:cm)



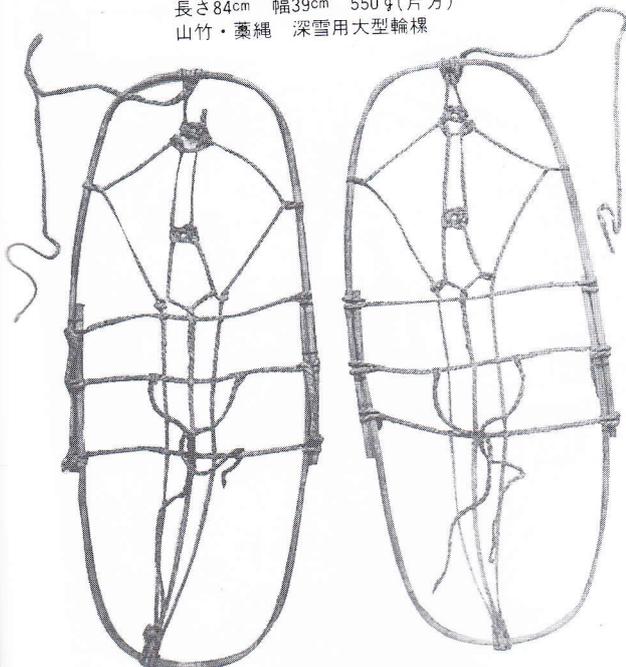
スカリ 5-1-5  
 長さ111cm 幅35.6cm 540g(片方)  
 山竹・藁縄 深雪用大型輪標



スカリ 5-10  
 長さ65.5cm 幅33cm 580g(片方)  
 山竹・藁縄 深雪用大型輪楦

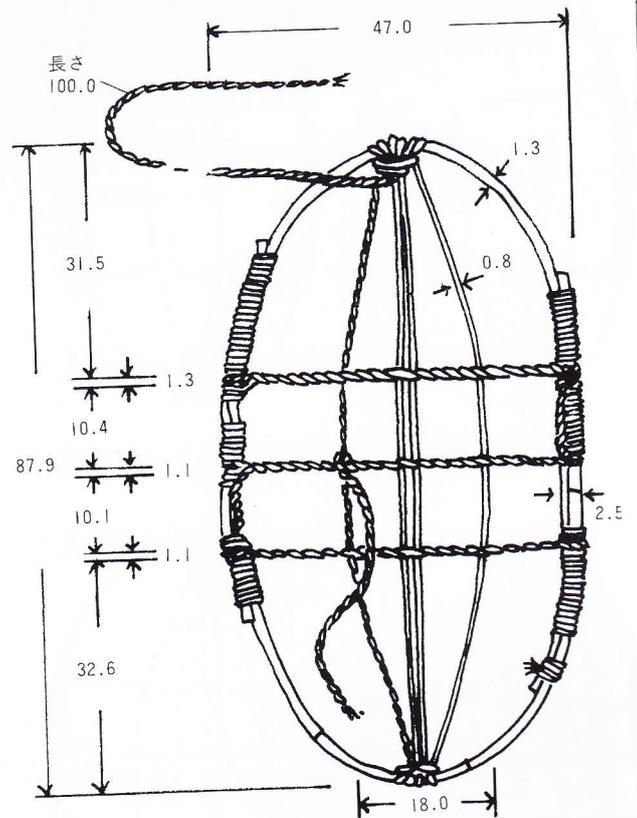


スカリ 5-14  
 長さ84cm 幅39cm 550g(片方)  
 山竹・藁縄 深雪用大型輪楦

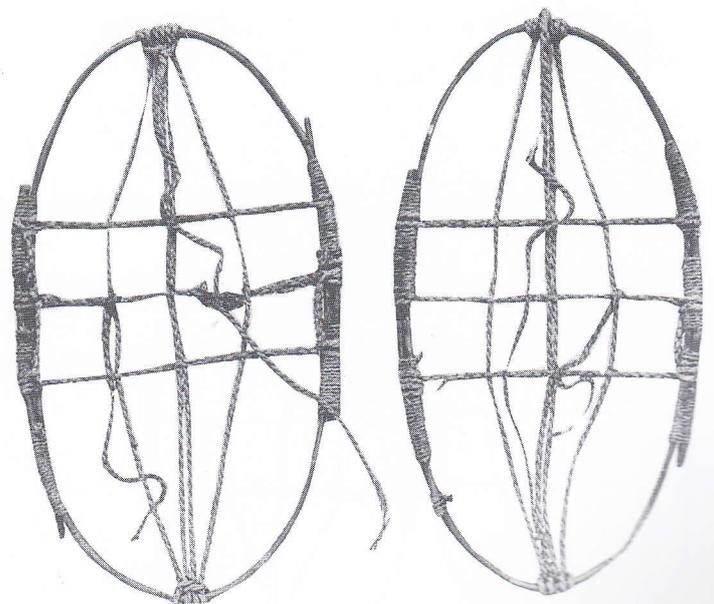


スカリ 5-13  
 長さ102cm 幅44.4cm 635g(片方)  
 山竹・藁縄 深雪用大型輪楦

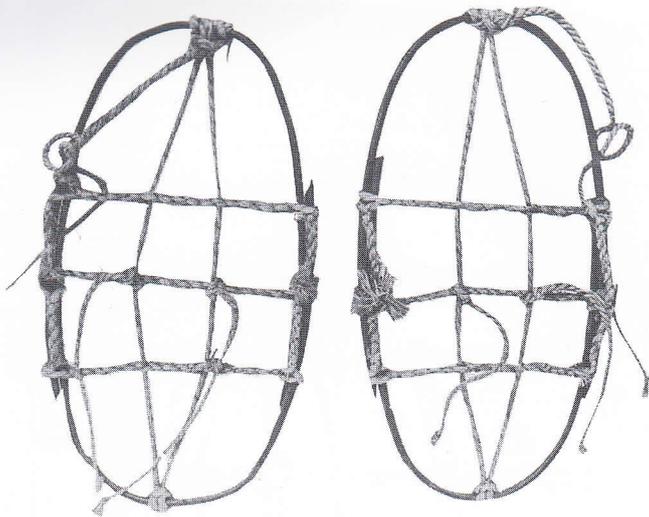
スカリ 5-9 実測図



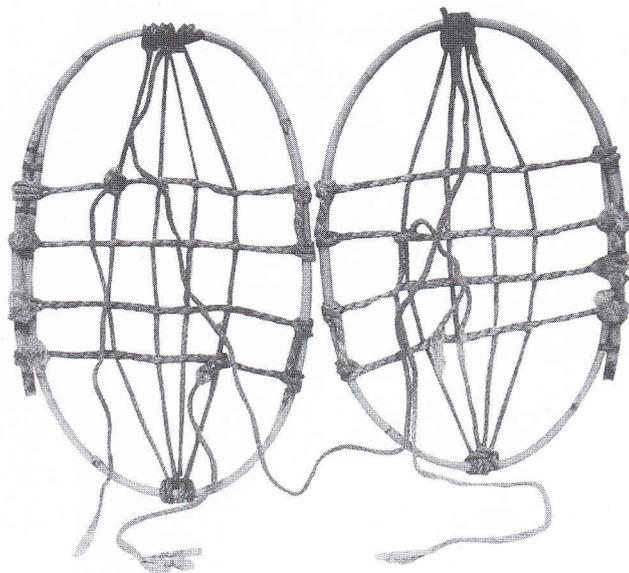
(単位: cm)



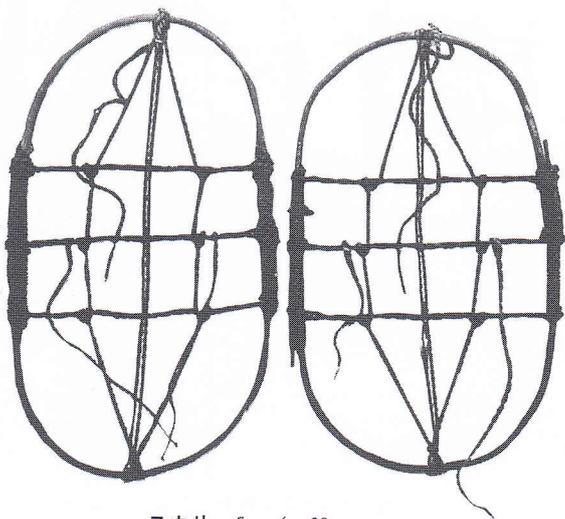
スカリ 5-9  
 長さ87.9cm 幅47cm 510g(片方)  
 山竹・藁縄 深雪用大型輪楦



スカリ 5-イ-18  
長さ81cm 幅41.7cm 490g(片方)  
山竹・藁縄 深雪用大型輪楦



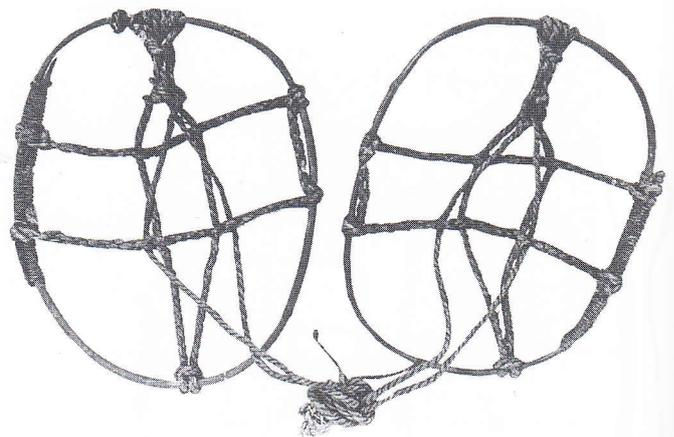
スカリ 5-イ-20  
長さ60cm 幅38cm 489g(片方)  
山竹・藁縄 深雪用大型輪楦



スカリ 5-イ-22  
長さ79.5cm 幅46cm 530g(片方)  
山竹・藁縄 深雪用大型輪楦

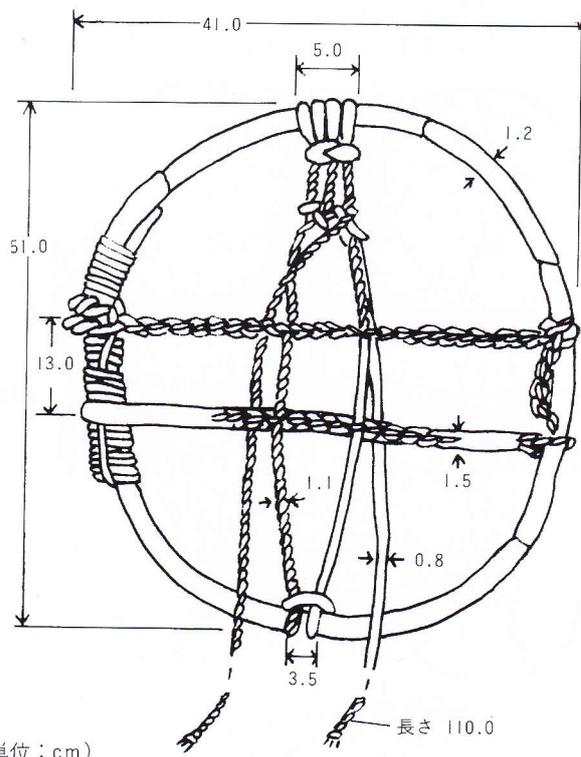
## ② 道踏み・雪上歩行用具

道踏み専用の用具として、前項でスカリ・ゴカリを紹介したが、普通の積雪量の時は大型に作ったカンジキを用いることが多い。この方が路面を固く踏むことができ、効率的なのである。しかしこれは、新雪の積もった雪原を歩く時などにも履くことがあり、道踏み専用ではなかった。上記のことからすれば、大型カンジキは雪上歩行用でもあったわけだが、これは雪の深い場合であり、普通、降雪時の遠出の際に用意携行したり、浅雪の山歩きに用いたのは小型カンジキであった。また小型のものは、



カンジキ 5-イ-25  
長さ51cm 幅41cm 273g(片方)  
山竹・藁縄 輪楦

### カンジキ 5-イ-25 実測図



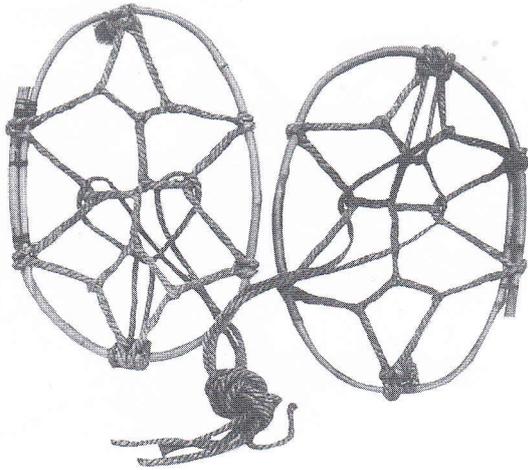
屋根の雪掘りの際にも、滑り止めの意味で足につけた。

雪上歩行用の履物は、「衣生活」の項でも見てきたが、長沓状のスッポン、短沓状のスッペとハツパキの併用、ワラグツなどが主であった。路上歩行の場合、普通はカンジキを用いないが、場合によっては、雪にぬかるのを防ぎ、滑り止めとしての機能を果たすこともあった。

コシキは道踏みの補助具として使ったが、これを細身にしたツエゴシキは、山道を歩く際に護身用として携行し、雪崩にあった時など有効に利用した。



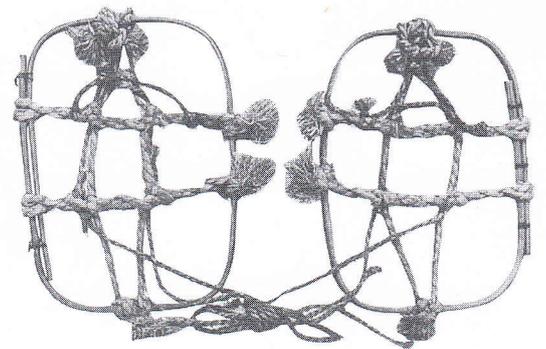
■雪中避難小屋



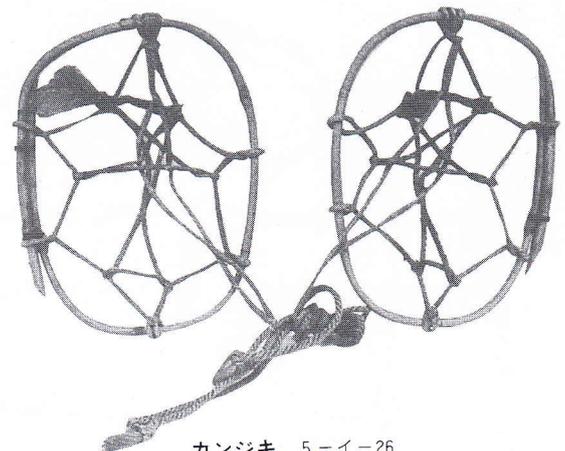
カンジキ 5-I-32  
長さ44.5cm 幅31.5cm 282g(片方)  
山竹・藁縄 輪標



カンジキ 5-I-31  
長さ40cm 幅34cm 240g(片方)  
山竹・藁縄 輪標

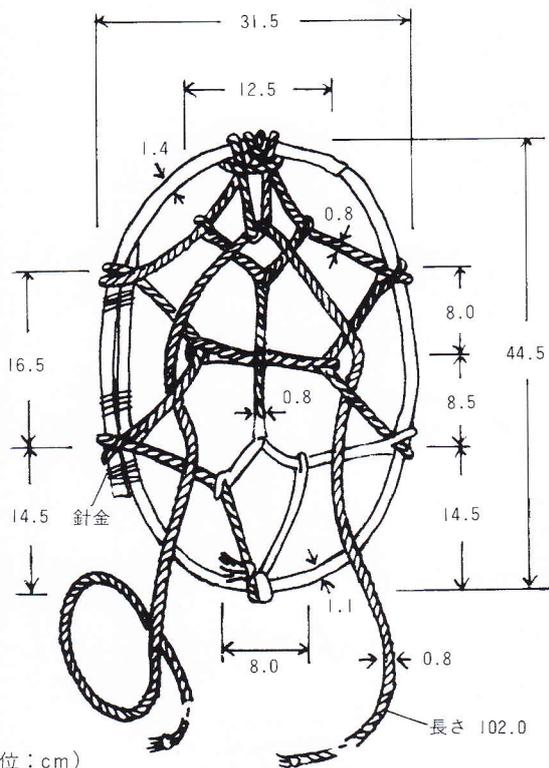


カンジキ 5-I-35  
長さ37.5cm 幅29.2cm 247g(片方)  
山竹・藁縄・針金 輪標

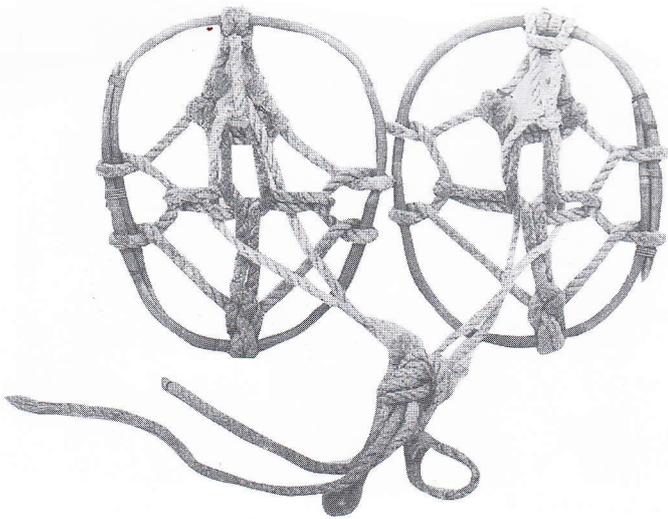


カンジキ 5-I-26  
長さ35.6cm 幅26.4cm 266g(片方)  
山竹・麻縄 輪標

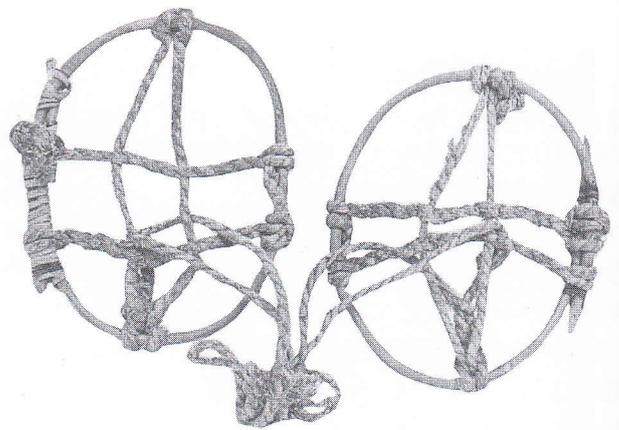
カンジキ 5-I-32 実測図



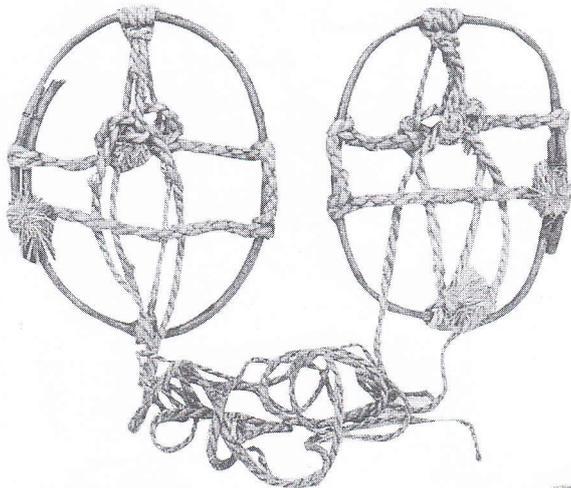
(単位:cm)



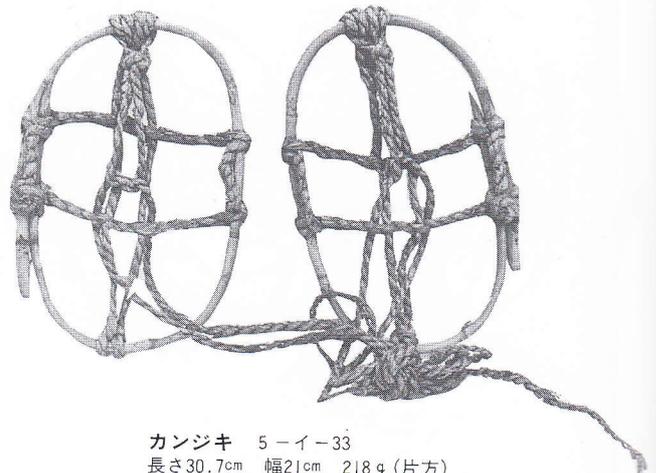
カンジキ 5-イ-39  
 長さ34cm 幅28.3cm 335g(片方)  
 山竹・麻縄 輪標



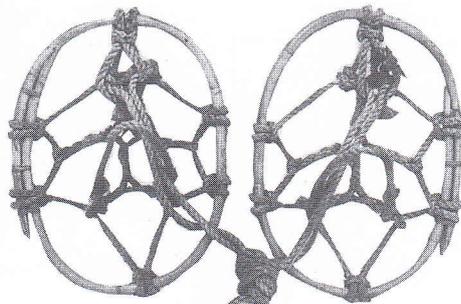
カンジキ 5-イ-28  
 長さ34cm 幅26.4cm 215g(片方)  
 山竹・藁縄・針金 輪標



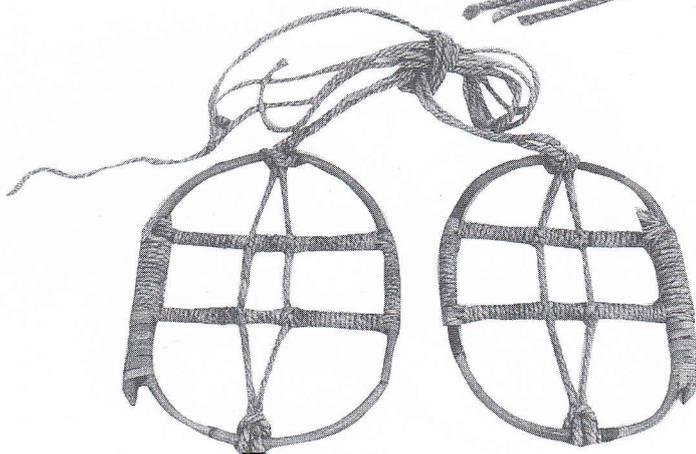
カンジキ 5-イ-38  
 長さ32.5cm 幅25.5cm 170g(片方)  
 山竹・藁縄 輪標



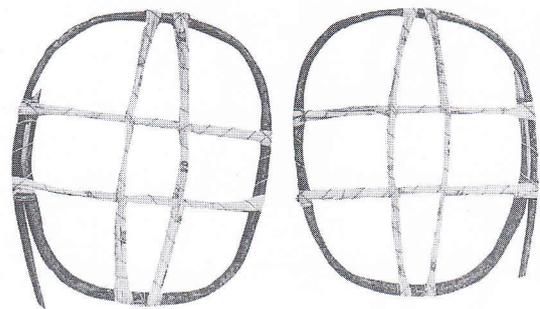
カンジキ 5-イ-33  
 長さ30.7cm 幅21cm 218g(片方)  
 山竹・藁縄 輪標



カンジキ 5-イ-30  
 長さ30.5cm 幅23.5cm 240g(片方)  
 山竹・藁縄 輪標

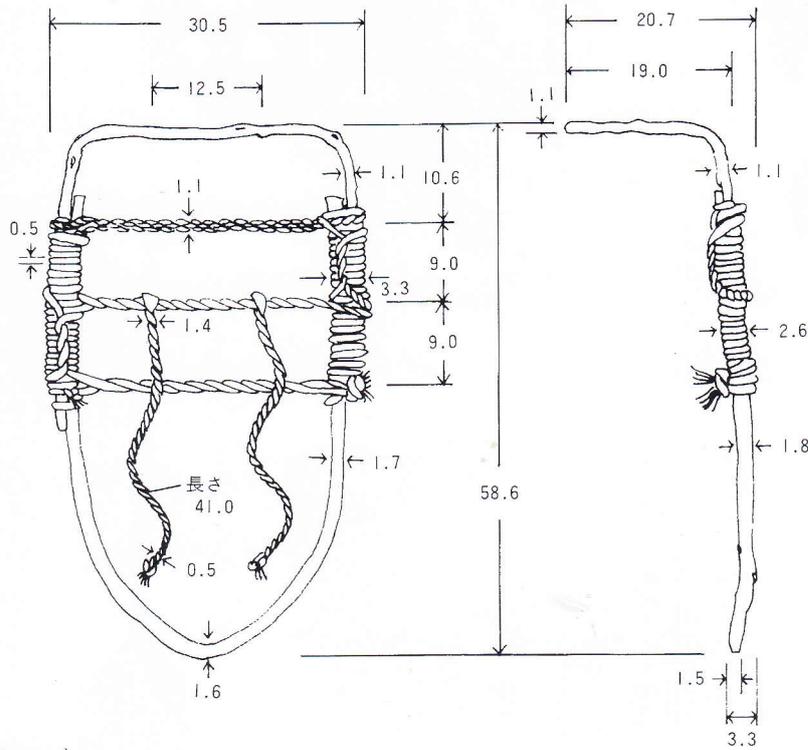


カンジキ 5-イ-41  
 長さ35.2cm 幅25.4cm 190g(片方)  
 山竹・藁縄 輪標

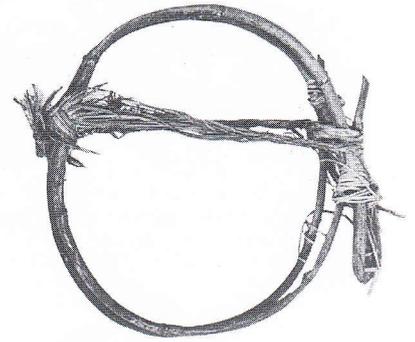


カンジキ 5-イ-40  
 長さ34.5cm 幅29cm 186g(片方)  
 クロモジ・山竹・針金 輪標

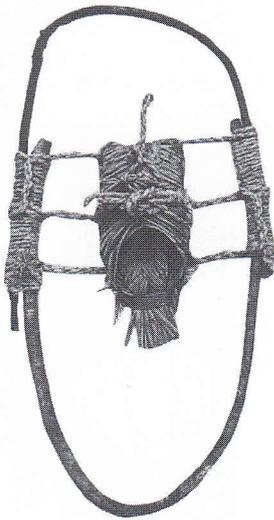
ハナカンジキ 5-イ-42 実測図



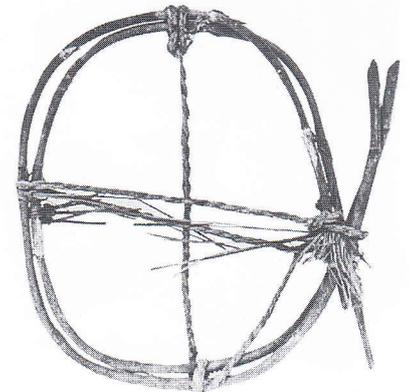
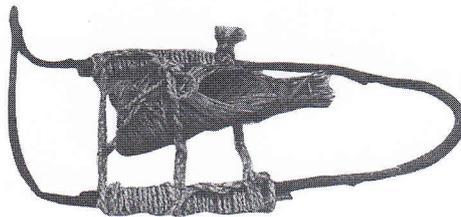
(単位: cm)



カンジキ 5-イ-44  
長さ31.5cm 幅30.5cm 80g(片方)  
山竹・藁縄 輪標(半製品)



ハナカンジキ 5-イ-42  
長さ58.6cm 幅30.5cm 382g(片方)  
マンサク・クロモジ・藁縄 輪標



カンジキ 5-イ-43  
長さ38cm 幅32.2cm 83g(片方)  
山竹・藁縄 輪標(半製品)

カンジキについて

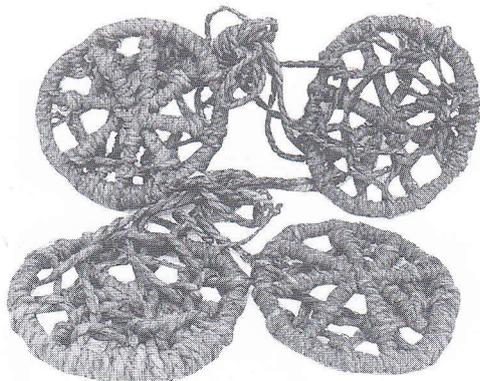
当地方には、「カンジキは夕顔棚の下でツベエルものだ」という言葉がある。ツベエルというのは、<sup>わかんじき</sup>輪標に縄を掛けて組立てることで、要するに作ることである。この言葉の意味は明確ではないが、標は、夕顔の時期つまり夏のうちから準備しておくものだ、ということだと思う。

カンジキのツベエ方は、以前は木や竹を曲げた輪に井桁状に縄を張ったものが一般的であったが、戦後になると、いわゆる<sup>まきつこう</sup>亀甲状の掛け方が導入され、現在はおしろ後者的方が多くなった。輪の材質も古くは杉の枝・クロモジ・マンサクなどの雑木類を用いたものが多かったが、

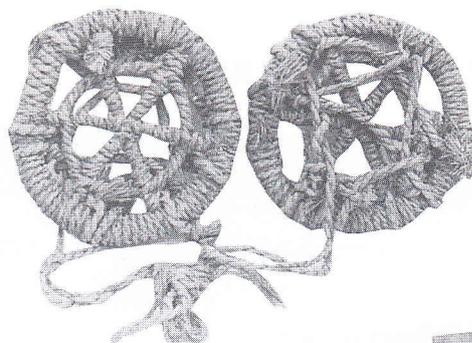
最近では、山竹を利用したものが主流になった。

上の写真のハナカンジキは木製で、鼻先を上へ湾曲させて雪中歩行時の爪先のかえりを良くしたものだが、当地では比較的例が少なく、平板・直線型のものが多い。その右隣の輪だけのものは、輪の形を整えるための準備処置を施したもので、夏うちに用意したものである。

次頁のウマカンジキは馬用で、戦中・戦後のころから普及はしたが、雪が深いためか当地ではあまり実用されなかった。実は戦時中、馬が軍に徴用されて雪道を引出す折にこれを用いたためとも言われている。



ウマカンジキ 5-イ-47  
長さ28cm 幅26cm 432g (1個)  
山竹・藁縄 馬用標



ウマカンジキ 5-イ-48  
長さ28.5cm 幅27.5cm 505g (1個)  
山竹・藁縄 馬用標



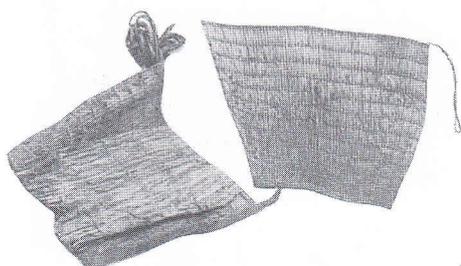
スツボン 5-イ-51  
高さ34.7cm 沓長さ32cm 318g (片方)  
藁・布 藁長沓(円筒型)



クツツボン 5-イ-52  
高さ36.5cm 沓長さ27.5cm 353g (片方)  
藁 藁長沓(沓部藁沓型)



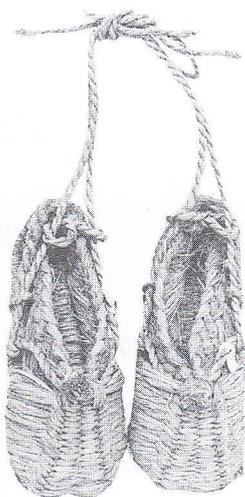
ツエゴシキ 5-イ-59  
全長93.5cm 刃先幅19.5cm 570g  
ブナ 雪道携行用木鋤



ハツパキ 5-イ-56  
長さ24cm 80g (片方)  
藁 藁短沓併用脛当



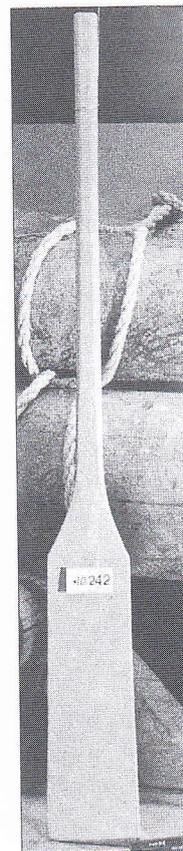
イタチ 5-イ-57  
長さ30cm 74g (片方)  
藁 藁沓併用脛当(筒型)



スツペ 5-イ-54  
長さ26.8cm 幅11.1cm 222g (片方)  
藁 藁短沓



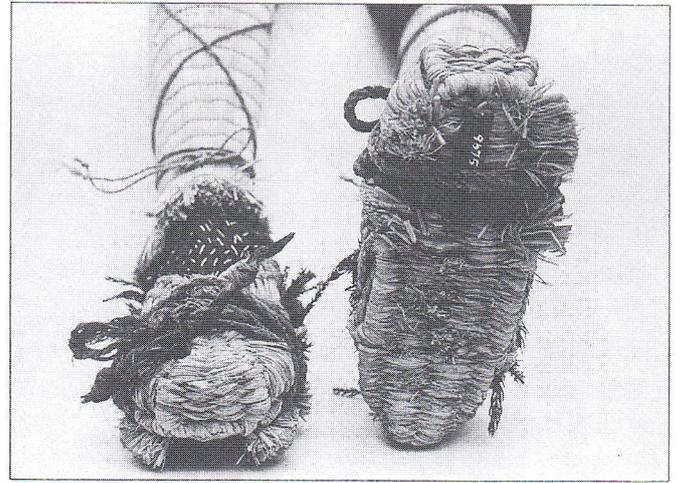
ワラグツ 5-イ-58  
長さ30cm 幅12cm 190g (片方)  
藁 脛当併用藁沓(スリッパ型)



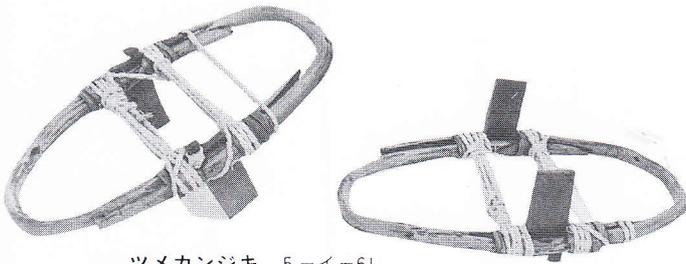
ツエゴシキ 5-イ-60  
全長116.5cm 刃先幅13.3cm 725g  
ブナ 雪道携行用木鋤

③ 雪氷上歩行用具

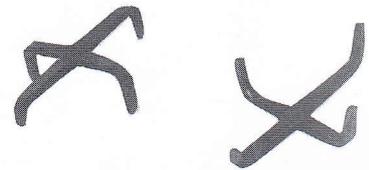
雪氷上歩行用具と言っても当地の場合、春先になって固く凍結した雪原、特に傾斜面を狩猟などで歩く時につけるツメカンジキやカナカンジキ、雪道の表面が凍って滑り易くなった時につけるスベリドメ類があげられる。また、藁製履物は、それ自体に滑り止めの効果があった。ゴム靴は靴底が摩耗するとよく滑るので、藁縄を巻いてそれ用としたが、後に取付け金具が出回った。木挽きなどが凍結した雪上で木材を扱う時に、これを藁沓につけることもあった。



■スッペに取付けたスベリドメ



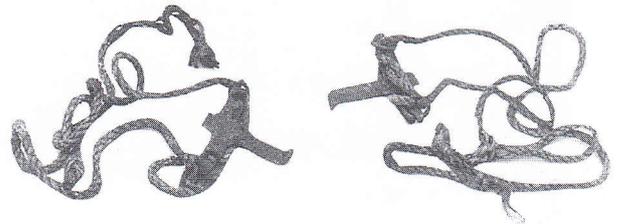
ツメカンジキ 5-イ-61  
長さ36.5cm 幅24cm 288g(片方)  
クロモジ・イタヤ(爪)・藤(縄) 爪付標



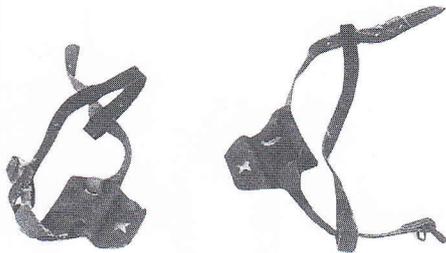
カナカンジキ 5-イ-62  
15×10.3cm 高さ3.8cm 170g(片方)  
鉄 鉄製標



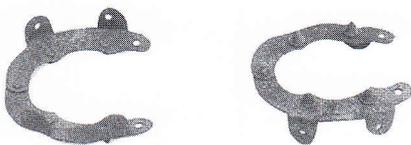
スベリドメ 5-イ-64  
長さ13cm 幅7.2cm 高さ2.9cm 100g(片方)  
鉄・麻縄 鉄製標



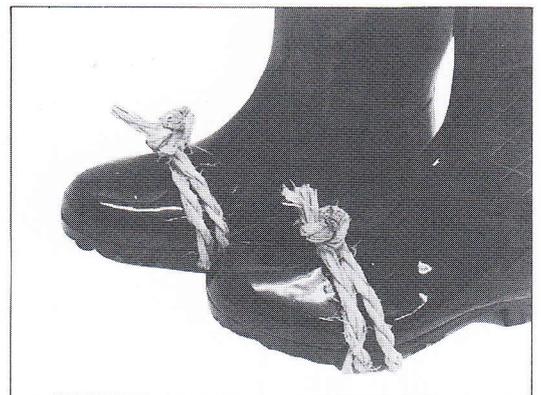
スベリドメ 5-イ-63  
長さ7cm 幅11cm 高さ2cm 120g(片方)  
鉄・麻縄 鉄製標



スベリドメ 5-イ-66  
長さ6.2cm 幅5.5cm 高さ1.8cm 88g(片方)  
鉄・革 鉄製標(ゴム長靴の踵に装着)



スベリドメ 5-イ-68  
長さ6.6cm 幅7.1cm 高さ1.4cm 25g(片方)  
鉄 鉄製標(ゴム長靴の踵に装着)



スベリドメ 5-イ-69  
縄太さ0.8cm 28g(片方)  
藁 ゴム長靴に巻いて滑り止めとする縄

#### ④ 照明等用具

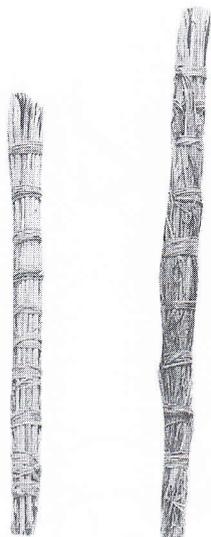
夜の雪道には、灯火照明用具が不可欠であった。雪面はすべて白く、道も白いのでそれらが識別できない。道の所在は分っても、凹凸が見分けにくいからである。

近隣の出歩きにはロツカクやブラ提灯を、遠出の時は折畳んで携帯できる小田原提灯、あらたまって他家を訪れるときなどは弓張提灯を持った。その後、カーバイドを使うカンテラなどがあらわれたが、乾電池を使用したいわゆる懐中電気が市販されるようになると、これが携帯用照明具の主流になった。

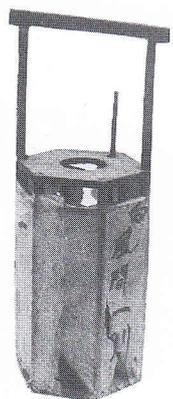
昔、灯火具もままならないころでも、雪中の峠越えともなると、芋ガラや山竹、松の根などを束ねて作ったタイマツを用意した。峠の麓の家では、それも持たずに来る人のために、タイマツを予め用意しておいて与えたものだ、という話を市内猿倉で聞いたことがある。

写真下段にあるメジルシの類は、激しい降雪の日や吹雪で道の所在が判別できなくなるような時、道筋や曲り角にこれを立てて、直接の道標としたものである。大抵これは、篤志の人が行なったものであった。

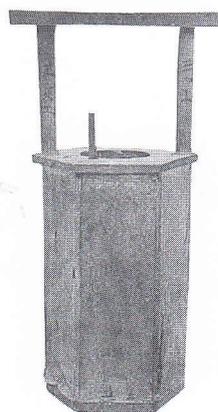
#### 〔雪道携行灯火具〕



タイマツ 5-イ-70  
長さ75cm 140g(左) 長さ90cm 190g(右)  
カラムシの茎(芋ガラ)・藁 雪道用松明



ロツカク 5-イ-71  
全高48.7cm 443g  
杉・和紙 ロウソク使用  
(古くは油火)



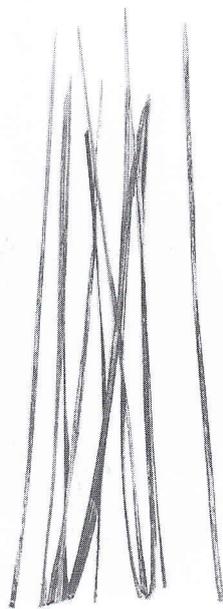
ロツカク 5-イ-72  
全高47.9cm 612g  
杉・和紙 ロウソク使用  
(古くは油火)



ユミハリ 5-イ-78  
全高41cm 255g  
木製ツル・竹ヒゴ・鉄・油紙  
ロウソク使用

ブラチョウチン 5-イ-75  
提灯高さ36cm 柄長さ45cm 185g  
竹ヒゴ・鉄・油紙・竹 ロウソク使用

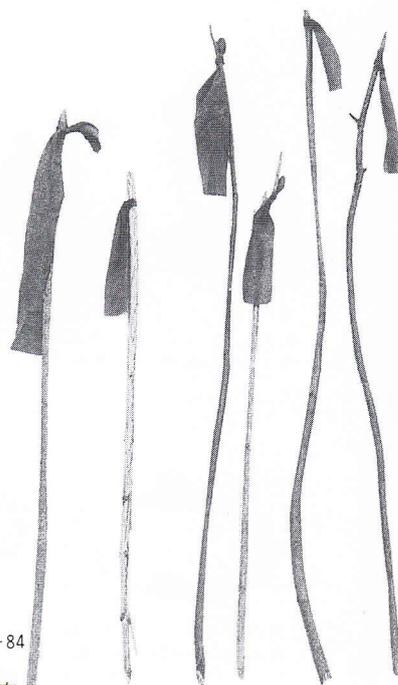
#### 〔除雪・吹雪時道跡標識〕



メジルシ 5-イ-82  
長さ90~106cm  
カラムシの茎(芋ガラ)



メジルシ 5-イ-83  
長さ187cm(左) 199cm(右)  
竹・赤い木綿布

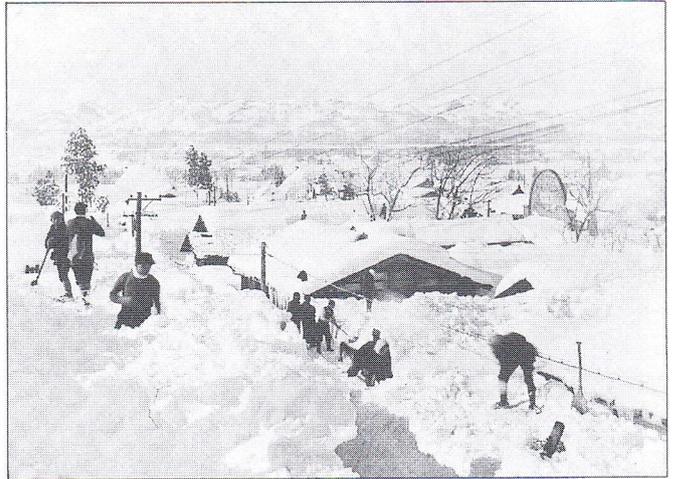


メジルシ 5-イ-84  
長さ102~141.5cm  
竹・雑木・赤い木綿布

## 雪団子落としと電線起し

十日町の市街地の雁木通りは、普段は無雪道路で下駄履きで歩く人も多い。しかし、大雪の日ともなればそこにも雪が降込む。その雪が下駄の歯に挟まり、さらに雪が付着すると団子状になって歩けない。そこで雁木の柱に下駄を打ちつけて雪を落とす。そんな時のために柱の根元を板で囲ってそれ用としたり、木串を作って吊しておき、団子の突き落とし用に使ってもらう。これらが雪団子落としである。

電線起しは、雪道が屋根よりも高くなって電線が歩行者の邪魔になる時、それを上げるための仮電柱のことである。



■屋根まで雪に埋れた街並

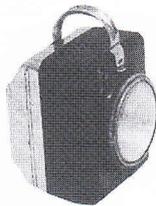
## 〔その他〕



オダワラチョウチン 5-イ-76  
提灯長さ24.5cm 253g  
銅・竹ヒゴ・油紙・鉄 ロウソク使用



オダワラチョウチン 5-イ-77  
提灯長さ14.5cm 130g  
銅・竹ヒゴ・鉄 ロウソク使用



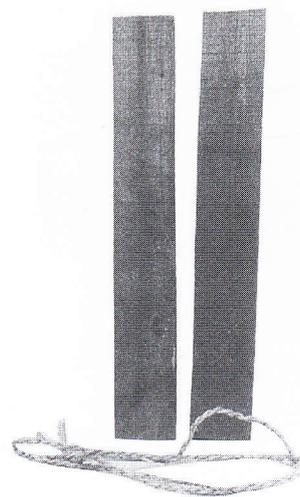
カイチュウデンキ 5-イ-81  
全高11.4cm 幅7.3cm 522g  
真鍮・その他 乾電池使用



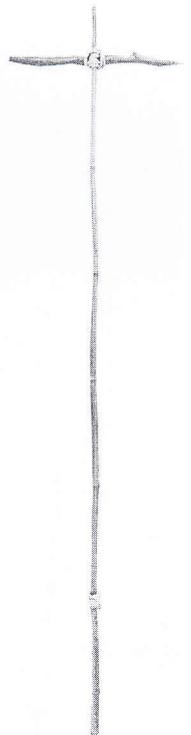
カンテラ 5-イ-79  
全高27.7cm 440g  
ブリキ・ガラス ロウソク使用



カンテラ 参考品  
全高26cm 970g  
真鍮・ガラス カーバイド使用

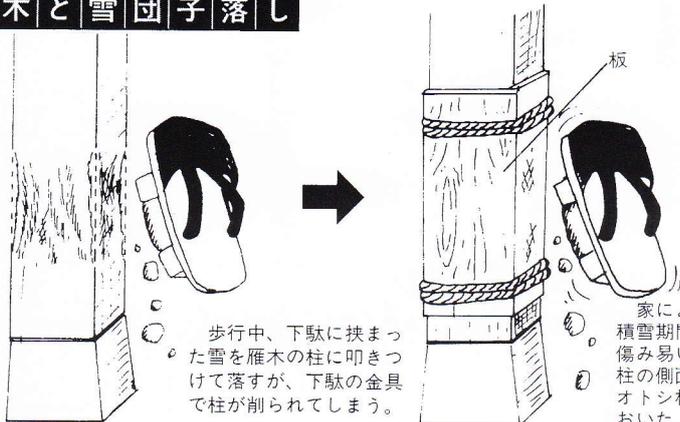


ユキダンゴオトシ 5-イ-85  
板70×10.4cm 1,250g  
杉・藁縄 雁木の柱の保護用板



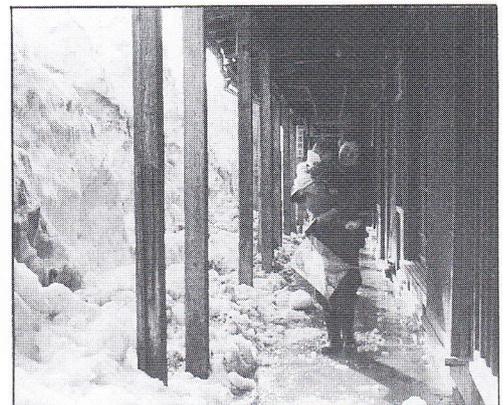
デンセンオコシ 5-イ-86  
全長177.6cm  
竹・雑木 電線を持上げる仮電柱

## 雁木と雪団子落とし



歩行中、下駄に挟まった雪を雁木の柱に叩きつけて落すが、下駄の金具で柱が削られてしまう。

家によっては、積雪期間中、特に傷み易い玄関先の柱の側面に、ユキオトシ板をあてておいた。



■雁木通り

## ロ 通信用具

電話によって各戸が通話できるようになったのは、極めて最近のことである。社会生活を維持していく上で、お互いの意思疎通は基本的な要素であるが、それまでの実情は相手方に向いて面談するしかなかった。雪中の通信連絡は、雪道の確保と深く関連していたのである。

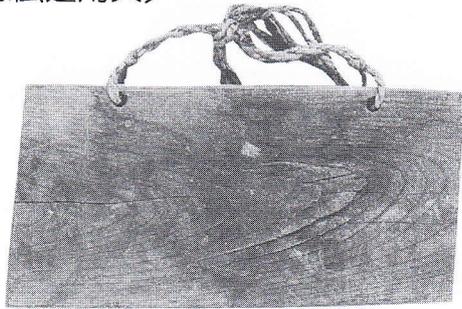
たとえば、人の死亡を村外の親類縁者に即刻知らせるには、雪中であれ夜間であれ、二人一組の告げ人を立てたが、こうしたことは、その辺の事情を物語っている。またこれは、緊急時の伝達のための特設飛脚ともいえるが、不急の事柄では人に託しての言伝といった方法もよ

くとられた。明治年代に入り、郵便が制度化されて一般のものとなると、人々はこれを利用するようになった。

近隣地域の緊急通報、たとえば火災発生<sup>ほんしやう</sup>の報知<sup>ひのみやくらほん</sup>などに際しては、叫び声による告知から寺の梵鐘・火見櫓<sup>ほんま</sup>の半鐘・サイレンなどを用いたが、ここに掲げた板木やホラ貝などの日常的な音響伝達用具も同様に用いた。

写真下段のタテフダは、簡易でいかにも雪国らしい意思伝達用具の例である。伝言内容を端紙やツケギなどに書き、それを道端の雪上に突き立てておくのだが、これには除雪用具のコシキもよく利用された。

### 〔意思伝達用具〕



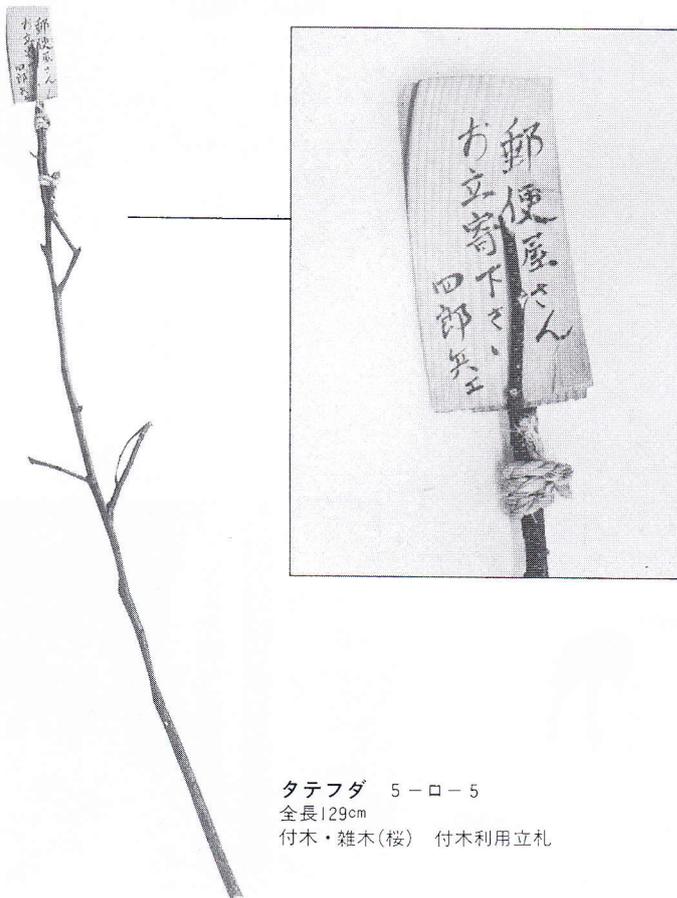
ハンギ 5-ロー-1  
49.3×24cm 厚さ6.5cm 5,000g  
ケヤキ板 緊急作業等の出勤合図用板木(槌併用)



ツチ 5-ロー-2  
全長39.4cm 268g  
朴 板木用槌



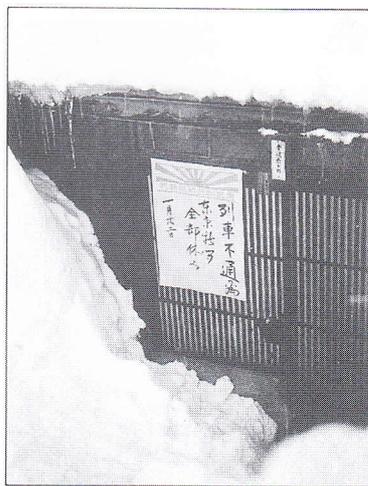
ホラガイ 5-ロー-3  
全長21.5cm 250g  
ホラ貝 災害その他の報知用



タテフダ 5-ロー-5  
全長129cm  
付木・雑木(桜) 付木利用立札



デンゴンパン 5-ロー-4  
全長100cm 刃先幅26.8cm 1,000g  
ブナ コシキ利用伝言板



■ コシキを利用した伝言板

■ 列車不通による新聞不配の知らせ

■ 雪崩危険箇所を進む郵便遞送隊

〔郵便配達用具〕



ユウタイ 5-ロー-6  
長さ80cm 幅38cm 715g  
木綿・その他 郵便物運搬用袋(郵袋)



ユウビンボウ 5-ロー-8  
径17cm 133g  
ラシャ 郵便配達人用



ユウビンマント 5-ロー-11  
全長112cm 721g  
ラシャ 郵便配達人用



ユウビンボウ 5-ロー-9  
径16.5cm 125g  
メルトン・縹子 郵便配達人用

郵便遞送隊

雪に閉されて、村外から訪れる人もない雪中、郵便さんの運んでくれる郵便物は、何よりの楽しみであった。それは、遠く隔てられている肉親や世間との唯一の窓口だったからである。しかし、人通りもない山坂の雪を踏み分け、毎日村へ来てくれる郵便さんの苦労は、並大抵のものではなかった。ここで取上げる郵便遞送隊は、家ごとに手紙を配達する仕事ではなく、その郵便物を遠く離れた郵便局まで、人力で運び届ける仕事であるが、これもまた極めて辛苦の多いことであった。十日町局からは、現中魚沼郡川西町および東頸城郡松代町まで遞送が行われていた。中でも松代までの道は遠く険しく、雪崩の危険を冒しての輸送であった。郵便袋に詰めた重い荷を背負い、隊伍を組んでの輸送は、昭和40年代まで続いた。



■ 市内名ヶ山の中継地で荷を交換するようす

## ●交通・通信用具品目一覧〈計97点〉

イ、交通用具 ●道路み用具：ゴカリ・スカリ ●道路み・雪上歩  
行用具：カンジキ・ハナカンジキ・カンジキ（半製品）・ウマカン  
ジキ・スッポン・クツズッポン・スッペ・ハツパキ・イタチ・ワラ  
グツ・ツエゴシキ ●雪氷上歩行用具：ツメカンジキ・カナカンジ  
キ・スベリドメ ●照明等用具：タイマツ・ロツカク・ブラチヨウ  
チン・オダワラチヨウチン・ユミハリ・カンテラ・カイチュウデン  
キ・メヅルシ・ユキダンゴオトシ・デンセンオロシ  
ロ、通信用具 ●意思伝達用具：ハンギ・ツチ・ホラガイ・デンゴン  
バン・タテフダ ●郵便配達用具：ユウタイ・ユウビンボウ・ユウ  
ビンマント